

# No.5 芥川だより

編集発行人 下村嘉明

発行所 着物から服を仕立てます 梵

高槻市芥川町2-14-3

TEL 072-681-8870

発行日/2006年11月20日

ご希望の方にはお送りします

お気軽にお問い合わせ下さい。

e-mail:akutagawa\_dayori@yahoo.co.jp



## 正月

年の瀬が近づくと、祖父が小屋の土間で「しめ縄」を作る為に、秋に刈った稲藁を木槌で打ち始める。庭では父が木臼で餅を搗く「あつ、あつ」といいながら母が蒸籠で蒸した米が飛び散らないように手で寄せる。私も杵で搗きたいと思いながら見ていた。

主手間、居間、板間の神棚、オクドさん、台所、玄関、前栽（せんざい・家の前の庭）の神さんに、「しめ縄」に山で採ってきた裏白（うらじろ）をつけて大晦日の夕方から灯明と共に奉る。

大晦日の夜には、父は収穫した米を一斗枡に入れ、きわい豆、昆布、松の枝、ゆずり葉、くし柿などを居間の神棚の下に並べ、五穀豊穡を神に感謝する。

元旦は早めに起き、みんなで自家製の白味噌の雑煮をいただき氏神様に参る。雪の積もっている時などは、特に神聖な感じがした。家に帰ると、書初めをし、みかんを食べ、炭で焼いたもちの中に白味噌をくるみ食べる。この味が忘れられない。幼い時の年の暮れから正月三が日は、特別な日々であったように思う。



## 芥川商店街歳時記

- 歳末大売出し 12月2日（土）～12月10日（日）

ガラガラ抽選&スピードくじ。一等 現金2万円。その他、盛り沢山の景品

- 日本棋院 八段 谷村義行 指導碁クラス

日時 毎月第二日曜日、午後3時半～6時半。会費 2500円。完全予約制。芥川囲碁サロン

- フィナンシャル・プランナーによる保険見直し相談会（無料）

毎週土曜日・日曜日（要予約）

保険の身近な相談所・総合保険事務所

☎0120-801-836

- 第二回 楽の会（奈良・元林院の芸姑・菊乃さんの舞） 割烹旅館 亀屋

12月17日（日曜日）午後6時～8時。会費、18,000円、満席になり次第、締め切ります。

- 高槻市商店街連合会 旅行参加者募集 小豆島・琴平方面 2泊3日参加費、（一人様 32,800円）

平成19年2月6日（火）～2月8日（木）3日間

今月の予定

■ 投稿記事 随時大募集！！ ■

お歳暮に看板商品しいつく(昆布椎茸煮)木箱詰合せ 全国発送無料！（但し、3000円以上）

浦昆布本店 ☎ 072-681-4152

「朝も昼も いも たこ なんきんに ぞっこん」という川柳をよんで、にんまりした私。

西の空は、雨の気配がない。畑の里芋の葉が、ぐにやとしていている。葉を切り、廻りにコッパをいれる。力をいれて引っ張る。相手も手ごわい。なかなか尻があらがない「どっこいしょ」の掛け声と共に出てくる、でてくる小芋。親の根っこからはなれるかと、しっかきくっついてる小芋。

ヨーシ、今日の献立はこれに決定。でもちよつと愛想がないなあ。魚屋さんへ。「おはよう」と気持ちのよいお姉さんとのあいさつ。手際がよい。「いくら？ 勘定は」。「ハイ」と私の手に紙きれが。よんでびつくり、お金じゃない。「この文字、へえ、これどう読むの？」。「京コトバ、京都は、こないいうてましたんやで」。「へえ」、私は高槻へ来てから始めてこの物体を見、二度食べて味わったんや。

田舎もんは魚の名前も知らんのか……

魚じゃない、干ものやろ。いや塩化物か。私の頭は混乱したけれど、その時は、若かった。さほどに腹も立たなかつたけれど。

皆さん、この紙きれの文字、何と読みます？

このまま、読んでもピンと頭に浮かんできませんやろ。さて、私の買いためたものは……。

『助宗子』これが私の買ったものです。お姉さん曰く『たらこ』と読むそうです。



### きものへの挽歌

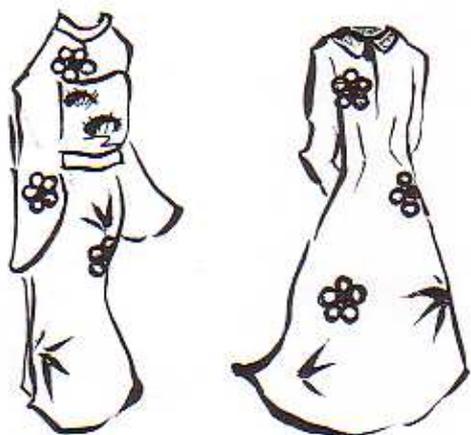
モンペと下駄でむかえた終戦の日、あれから、六〇年、日本の女性はずっと美しくなったことか。消えたモスリンやネルの着物。米と交換で、いろんなものが生きていた。嫁入りの着物は、母の努力で手に入れた物ばかり。でも安物として扱われてしまった。田舎人の着物、緋でも着て歩くことは許されなかった。たった一枚の緋、今考えてみると、緋など高級品で手に入らなかったとも思われる。

売れるのは振袖、訪問着、目の前で呉服屋さんが、風呂敷包みを開けて見せる。銘仙はどこへいったのか、安い布地として、着物、羽織として嫁入り前のお針仕事の材料だったのに。ウールや銘仙代わりの実用呉服は、またたく間にダメになった。やがて結婚して出て行く娘達のために、何万もかけて一揃い買ってやる姑の気持ち、持参させる着物は、家計が火の車でも、買って与える。働きバチはどこへ。ちよこに一杯の酒も、遠慮しがちに、哀れなものよ、誰のおかげで、着物が買えるんだ、と二人の男のために言いたい。

可愛い娘だもん、不自由な思い、片身のせまい思いをさせたくない。わからないこともない。でも火の車を大事にしてほしい。

いろいろな荒波を超えて作られた着物。妹は、我が家へ着て現れたことがない。フォーマル着物、ドレスとかが和服を食っているのかも知れない。そう簡単に着物は無くならないだろうが、一つには日本の女性の衣生活から、だんだん無縁のものとなりつつある。

店前に並ぶなつかしい着物類を見て、思い出と共に、何とかして生かして着てみたい感情を抑えることが出来ない。



## 山岳部に入る

梵店主

京都御所に桜が咲き始める頃。

入学式を終え晴れて大学生になったよっちゃんは十八歳、田舎の高校を卒業し京都にやってきた。彼の性格の特徴は、思い切りの良さである。調子者によくある「えいつ」と飛び込む度胸である。そんな彼が何を考えて山岳部に入ったかは後日の話にして、よっちゃんは、はじめての合宿で強烈な体験を味わうことになる。

部は遭難事故直後でなんと一年生部員が全員辞め、新人はよっちゃん一人であった。そして、目指すは冬の剱(つるぎ)岳、彼もいれて六名である。当然一年生は最も重い荷を担ぐ。

夜行列車の日本海に乗り、富山から乗り換え上市まで電車で行く。上市からはマイクロバスで登山口の馬場島(ほんばじま)を目指す。雪が次第に深くなり、バスは進めなくなると手前の伊折村で降りされた。

かんじきを着けザックを背負う。六十キロを超えている荷はずしりと重い。リーダーが馬場島まで走ろうといい出す。山岳部名物のマラソンだとか。すべてが初めての経験でわけがわからず、よっちゃんは走った。少しでも遅れると怒



られるので、必死について行った。やっとの思いで馬場島に着き、ここでテントかと思つたが、行けるところまで行くという。

初めのピッチ(五〇分歩き一〇分休む)は何とかついて行けたが、次のピッチからが大変だった。ハイ松の上に新雪が積もつたところは歩きにくい。足を踏み外すと、ズボットと胸まで沈んでしまう、重いキスリングを背負っているから抜け出すのに体力を消耗する。上級生からは「早く行け、バテるな」、罵声とも激励ともとれる声がかかるが、思うように足が動かない。いくらバテていても、誰もよっちゃんの荷を担いでくれはしない。よっちゃんはフラフラになつてテントの張れそな場所に辿り着いた。雪をならし踏み固めた上に建てたテントの中で、よっち

やんに与えられたスペースは幅三十センチぐらいの寝場所だ。その狭い場所に個人装備や炊事用具を置いてから外へ出て、水をつくるための雪のブロックを切り、強風を防ぐために雪のブロックを積み。

テントに入ればすぐに、晩飯の用意が始まる。夜はカレー、シチューなどの汁物と御飯。飯の仕度はすべて一年生の仕事と決まっている。

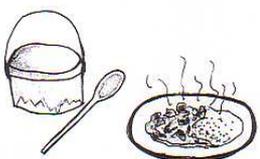
狭い場所を整理して石油コンロを置き、点火する。操作を微妙に工夫しないとうまくつかない。点火したら、コンロに圧力をかける。狭いスペースで慎重に素早く圧をかけていく。鍋をコンロの上に置き雪のブロックを素早く入れ、スプーンで雪を崩していく。少しの水ができれば、雪が融けやすくなる。晩飯の御飯、汁物、お茶に使う水、それから魔法瓶一本分の水をつくる。水ができたなら、最初に米を炊く。鍋に米と少ない目の水を入れる。米はとかない。水を少なくするのは蒸気を抑えるためだ。

早くしないと怒られるから、焦る。上級生がこと細かく指示する。姑が嫁に指導するように五人の先輩がいう。すべてに順番があり、決められたやり方があり、いわれる通りにしないと怒られる。飯炊きの途中で何度もスプーンで炊き具合をみて、水を足したり、

こがさないようにして芯がなくなればできあがり。次はカレーだ。まず鍋をコンロにのせ水を入れ、野菜とペミカンを入れる。野菜は校内のボイラー室で乾燥させたもの、ペミカンはマトンをラードで煮込んで固めたものだ。そしてルーを入れてできあがり。食器に御飯とカレーを注ぎ、みんなにゆき渡つたら、リーダーの「いただきます」を合図に食べ始める。この食事時間を、エッセン時間といった。少し遅れても早くても怒られる。

リーダーの合図で食べ始めたカレーの匂いに和み、よっちゃんは、今日の自分の頑張りに酔っていた。拍手してやりたかった。

「おかしい、くさい」、「なんや、これは」と皆がいい出した。「石油入れたん違うか、臭いわ」。よっちゃんも食べてみたが食べたものではない。石油のポリンは集めてテントの入り口の右に置き、水にする雪は左に置いた。「どうしようか、もう一度炊き直しか」、先輩の視線が集まる。吹雪がテントを揺らす。



「閣下、世界一高い山を発見しました」、一人のインド人技師がインド測量局のアンドルー・ウオー長官の部屋に駆け込んで、叫んだ。

このドラマチックなエピソードは「エベレスト」にまつわる話としてつとに有名ですが、実話かというところかなり疑わしいようです。実話にせよ作り話にせよ、最高峰の発見は世界史に記されるほどたいへん重要な発見であったことに変わりありません。それ以来、「エベレスト」という山の存在が最高峰として世界中に知られるようになり、八八四〇m(現在は八八四八m)という標高がこの山のもつとも重要な属性となるわけです。

では、麓に住むチベット人にとって、この山が世界最高峰であるということはどういう意味をもつのでしょうか。ここでは、チベットの古い山名チヨモカンカル(白い女神の山)と呼ぶことにします。

チベット人は山に神が住んでいると見ています。神が住まない山のほうがめずらしい。さまざまな神々、土俗的な神、密教仏典に登場する神、恐ろしい容顔で威圧する女神、そういう無数の神々が山の頂から人々を見守っ

ているのです。チヨモカンカルには不老長生の五姉妹が住んでいることは前号でふれました。

チベット人は自分たちの世界にある山を神が住むところと考え、その神どのような姿をしているのか、またどのような恵みをもたらしてくれるか、あるいは災いをもたらすか、そういう伝承をつたえています。そういう伝承を語り継ぐことよってチベット人独特の世界、コスモスをつくっているんですね。チヨモカンカルという山には五人姉妹の女神が住んでいるという伝承によつて、チベット人はこの自然の山と自分たちを結びつけているわけです。山と人を伝承がつかないでいるともいえます。

そういうコスモロジーに生きるチベット人にとって、世界で一番高い山であるという新たな性格はどのような意味があるのでしょうか。「あの山の高さは八八四〇mあります。それは世界で一番高い山ということですよ」といわれても、おそらく「ああそうですか」という程度の反応の仕方だっただろうと私は考えています。チベット人にとつて八八四〇mという高さは、地図上に引かれた国境線と同じようにほとんど意味のないことだったのではないでしょう。彼らの生活や精神的な営みとは関係ありませんから。

チベットには、チヨモカンカルと並んで、偉大なる雪山としてテイセがあります。テイセは西チベットの聖地マナサカランダに鎮座するカイラーサのことです。ヒンドゥ教やジャイナ教、チベット仏教の聖山として現在も多くの巡礼があつたと絶えません。カイラーサは天然の曼荼羅ともいいます。山そのものが宇宙をあらわしていると考えているわけですね。私は長い間この聖山に憧れ、二十年ほど前にカイラーサを目の当たりにしました。そのときの興奮はいまも忘れることはできません。

十九世紀の前半から、イギリス人を中心とする博物学者や地質学者が神々の座とあがめられたヒマラヤに分け入り、生態系や地形を調査し、標高を測量して、科学的知見を深めていきます。地図の空白部を探検し、ヒマラヤの実相を科学的に明らかにしていくわけですね。彼らはそういう探検的行動のなかで遭遇する発見という醍醐味を、昂揚しながら味わったにちがひありません。最高峰の発見もそのひとつでしょう。私は彼らの探検記録を読みながら、地図をたどり、チベットはどのようなところなのかと想像したものです。

最高峰の発見は当然その次に、世界一高い頂きに立ちたいという衝動を

アルピニストのあいだに引きおこします。登山については次号にゆずります。

前号で山名について述べましたが、ネパール名にふれるのを忘れました。近年ネパールではサガルマータという名で呼んでいます。サンスクリット語でサガルは世界、マータは頭あるいは頂きという意味らしいのですが、古くからそういう名で呼ばれていたかどうかは疑わしいですね。これまでの山名論争には登場しない名ですし、サガルマータの意味をみても、新たにつけられた名かもしれない。ちゃんとした裏づけはありませんので、確信はありませんが。



立ち話

## 「嘆きの道化師」

芥川のSさん

私にとって、忘れられない一曲があります。

仕事場のラジオから流れてきたリクエスト曲と、それに添えられた女性からの手紙。

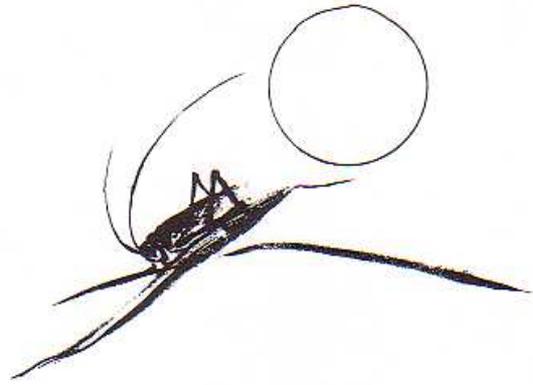
その内容は、「彼女の婚約者である彼が、結婚式を目前に控えた時、独身最後の記念にと穂高の涸沢へ行き、不幸にも大怪我を負い、式の一週間前に亡くなってしまった」というものでした。

ウエディングドレスを新調し、赤坂の霊南坂教会での式を夢見ていた彼女の心中は、計り知れないものでした。その時のリクエスト曲が、彼が大好きだった「嘆きの道化師」です。

道化師の派手な衣装や仕草とは裏腹に、なんとも言いようのない、物悲しさの漂う曲で、結ばれなかった二人の無念さと、淋しさに、思わず仕事の手を止めて聞き入ってしまう程でした。

あれから四十年余りが過ぎた今でも「穂高、カラ沢」と聞くと、当時の事が脳裏に鮮明に浮かび出される。

日々慌ただしく過ぎていく昨今、虫の音や、かすかに漂ってくる草花の香りを楽しみながら、秋の夜長、ふと昔を思い出してみるのも良いのでは…



「芥川だより」からの提案

### 「芥川ハイキング・クラブ」を作ろう

私の得意は、書くことでも、商売する事でもない、山歩きをすることです。そこで、二ヶ月に一度ぐらいから始めたらどうかと思う次第です。

日帰りの楽しいハイキングを考えますので、皆さんのご意見をお寄せ下さい。

梵まで

## 魚あれこれ

周防 春日丸

「アリストテレスの提灯」、何を想像されますか？

アリストテレスと言えば、ギリシャの偉大なる哲学者として有名な人名前である。その人の提灯とは……、興味津々！

実はウニの口にあたる部分のことである。アリストテレスは「動物学の祖」と言われるほど、幅広く生き物の生態を研究していたそうである（特に地中海のレスボス島でのウニの研究は有名とか）。口にあたる咀嚼器官は五枚の歯があり、これが提灯に似ていることから自ら命名したそうである。

ウニには眼がなく、殻の中はほとんど消化管と生殖巣で占められている。海のハリネズミとも呼ばれている棘だらけのウニは、決まった姿勢で岩などに張り付いている。この時口は棘のない下側の中央にあつて、口には歯に相当する提灯形の咀嚼器が五枚ついていて、この歯はフジツボなど硬い殻までかじり取れるほど強力で、日本の正式名称を「アリストテレスの提灯」というのである。ウニは、カラスミ、コノワタと並び「天下の三珍」、「海の珍味」として食されている。

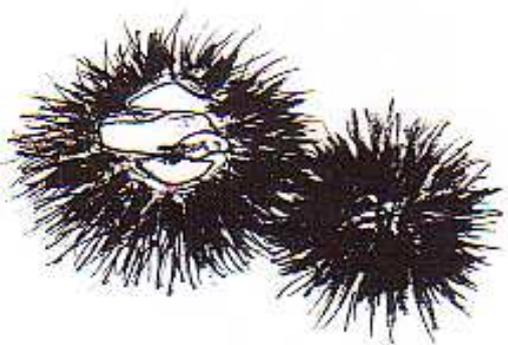
ウニは雑食性で、主食は多くのミネラルが含まれた昆布などの海藻を餌

にしている。独特の鮮やかなオレンジ色はビタミンAに似た働きをする物質によるもので、皮膚や粘膜を健康な状態に保ち、老化予防、がん予防、貧血予防などにも効果的、動脈硬化の予防、肝臓機能の強化など多くの効能をもつタウリンも豊富、いいことづくめで栄養価も高いのである。

またウニ殻には、窒素やリンが含まれているため畑に撒かれて肥料に（実際、ここ島では食べられるものとは知らず畑に入れていたとか）、釣り人に使われる「撒き餌」にも有効利用されている。

ウニは一般的に海胆・海栗と表記、字は体を表すではありませんか。他に雲丹・海丹とも書きますが、こちらは塩蔵加工したウニに用います。

チャンスがあれば「アリストテレスの提灯」、篤と見て欲しいものです。



# おかきと無料相談会

総合保険事務所 谷井 靖

当店は保険の代理店ですが、店先でおかきを売っております。

それは、今年の「鯉のぼりフェスタ」と「ジャズ・ストリート」で、何か当店もワゴン・セールでもと考えていたんです。保険をワゴンで売るわけにもいきませんから…。何かいいものはないかと、「おかき」を食べていたんです。「これや！」と思い、おかきを出したら、これが案外好評でしたので、イベント中だけのつもりが、ずるずると今もしつこく売っているという訳なんです。

皆さん、不思議そうな顔をしながら、自動ドアを開けて入ってこられます…。「おかきはいいの?」「ここは、なに屋さん?」「何でここでおかきを売ってるの?」とよく聞かれます。向かいの大阪農園さんに「このおきのお金は何処へ払うの?」と尋ねてから入って来られたお客さんもありました。最初は遊び気分を始めましたが、「これや!」と、また重大なことに気づいたんです。せつかくお金をかけた自動ドアも開けてもらわないと意味が無い。

「無料相談会」なんていうても毎日何人も来てくれない。そもそも「無料相談会」とは「お客様に来店していただき、場所を知っていただくこと」「店の中にどんな人間がいるかを知っていただくこと」そして「来ていただきたい安心していただくこと」が大切なことです。

それなら、先ずここに店があることを知っていただく。次に、何の店か知っていただく、と思ったんです。おかきが無ければ気づかれない当店も、おかきで足を止めていただき「こんな所にこんな店がある」と気づいてもらえる。

最近では、「ここ何屋さん?」と尋ねられたら…、「保険も扱っているおかきやです」(笑)なんて答えたりします。先日センター街で「あつ:おかきの:?:? こんなところでなにしているの!?!」と声をかけられました。「保険の相談しても大丈夫かいな…」と思われるかもしれませんが、「大丈夫! 安心して任せ下さい!」。とにかく、今では、保険の相談はなくてもおかきの売れない日はありません。七十万もかけた自動ドア:、一番お金がかかっています。毎日開けてくれるお客がある喜びをいつも自動ドアと一緒に感じてます。

## 高槻ぶんか辞典②

### キリシタン大名 高山右近

横山 高治

人は高山 その名は右近  
薫る歴史の 八丁松  
高槻えじやないか  
そじやないか

高槻音頭で  
エーソレソレひと踊り  
エーソレソレひと踊り

高槻藩永井家三万六千石の城下町、高槻の夏を彩る「高槻音頭」の第六節——。このおはやしのシンボルは何といてもキリシタン大名、高山右近(一五五二〜一六一五)である。

戦国末期、本能寺の変で織田信長が倒れ、近江安土の城と町が焼けたあと、高槻に異国情緒ただよう文化都市を造り、ユーロッパにまで高槻の名を伝えた右近。しかも信仰を守って独裁者の暴君、豊臣秀吉に抗い、マニラで悲劇的な生涯を終えたジュウスト(洗礼名に、人々は深い憧れを抱く。

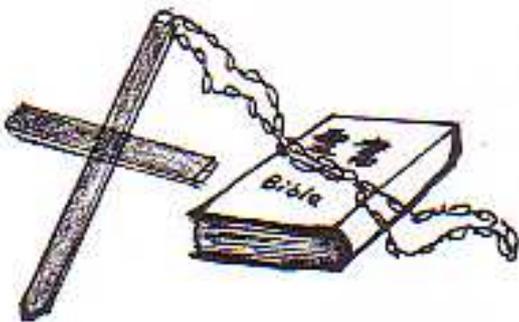
「日本史」通信で有名なポルトガルのイエズス会宣教師ルイス・フロイスも「高槻領内の二万五千の作民のうち信者は実に一万八千にのぼった」と記している。右近は天文二十一年(一五

五二、摂津国清溪村高山庄(豊能町)で嫡男に生まれ、大和国の沢城(宇陀市)で受洗したらしい。

永禄十一年(一五六八)、信長の芥川入城と共に和田惟政に従って高槻入り、惟正が白井川原の合戦で死んだのちクーデターを起こし、高槻城主に就任、善政を行った。天正十三年(一五八五)、播州明石六万石の城主に榮転するが、秀吉の禁教令で追放され、四国の小豆島、加賀の金沢に保護され、慶長二十年(一六一五)、徳川家康によってフィリピンに追放、マニラで亡くなった。

信仰については賛否両論もあるが、戦国乱世を正義と信条を貫いた男のロマンには感動を覚える人々も多い。

(天神町・歴史作家・「北摂歴史散歩」など著書多数)



# 山スキーと私

伝習社 井上純一

かつてレルヒ少佐によって本邦にもたらされた軍隊スキーから発展したスポーツスキーも、冬季登山の雪上歩行手段として定着し、さまざまな技術的体系が追及、確立された。

言うまでもなく本来のスキーは雪の山野歩の重要な手段であり、ゲレンデはその練習場所であった。またリフトの普及によりゲレンデは滑降の楽しさの追及と社交の場となりはて、用具は滑降専用に限定され、歩行・登高には到底役に立たない代物になってしまった。

そんな状態が約二十年続いた後、ヨーロッパからの新しい息吹として踵の上がるセフティビンディング、貼付シール、回転性能の良い登山用グラフィスキー等が豊富に輸入され、もちろんそれを待ち望んでいたアルピニスト達を喜ばせた。古典的山スキー時代から空白時代を経て再び白き峰々に想いを馳せる我らのこよなき時代が巡ってきたのである。

私が山スキーを始めた頃(四十数年前)はまだ単板にカンダハービンディングが主流で、よく捻挫をしたものだ。また良い山スキー靴がなく足首の軟らかい登山靴に甘んじるか、その登山靴と下り専用のスキー靴の2足を担がねばならなかった

重荷を背負っての新雪滑降の為の未だに直らない悪いフォームが身について、スキー学校の先生から愛想をつかされている。

かつて辿った比良、越美、奥越、但馬の山々でのスキーツアーの思い出は随分あるが、安サラーマ

ンのこととてホテルや民宿には泊まれず、雪洞やテントでの露天がほとんどであったが、それなりに若い血潮がうずいたものだ。

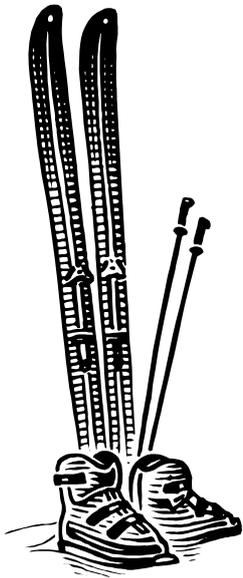
山にのめりこんだあげく、建築観の違いも含めて上司との意見の不一致から退職する羽目にもなってしまった。

私にとって建築事務所開業自営は純粋な建築活動への願いと共に、遠き白き峰々へ憧れも重なってしまっていたのである。

幾多の山行きにはすばらしい山の友がいた。山岳会や勤務先および、独立してからの山仲間との快い結びつき、楽しい友情がある。

数十年前の白馬小蓮華山大斜面での一人の滑落骨折の救出に仲間の力を結集したこと、梅池ヒュッテのチーフの救援が身に沁みたこと、それにその数年後の五月の妙高黒沢での誤って滝壺に転落した〇君のずぶ濡れになりながら怪我一つしなかった幸運、笑いをかみ殺しながら叱りつけたこと等、アクシデントさえも楽しい思い出の一コマとなった。

そんな訳で若い頃から憧れ続け、そしてまた、これからも永く想いを馳せるであろう「遠き白き峰々」こそ、私の拙い建築作品に込めて往くロマンの沸き出する源泉なのである。



## おすすめ

一家に一冊

北摂 高槻 茨木・島本)の歴史ガイドブック

横山高治著 「北摂歴史散歩」(創元社)

定価 1,575円

アルプラザ、大垣書店にて好評販売中

■この地域は、歴史の宝庫である。是非一読をお薦めします。歴史を知らずして文化は語れない。(梵店主)

## 「芥川だより」からの

### 新年の催しのご案内

ご愛読者の方に、「新春・初雑煮振る舞い」を元旦に行います。田舎の和知から、餅、白味噌を取り寄せ、白味噌の雑煮を無料でご皆さんに食べて頂きます。お神酒も少し用意致します。

日時、元旦 10時から(1000人分)

用意しますが、なくなり次第終了)

場所・芥川商店街・梵

\*お助けマン募集・当日手伝いして下さる方は、9時に来て助けて下さい。

建築家であり登山家でもある

井上純一

一級建築士事務所 伝習社

☎ (072) 681-6226

# 宮沢賢治の「土神と狐」を観て

梵店主

芥川商店街の近くにあるJT生命誌館が、十一月三日に「宮沢賢治を観る」と題して、語る仮面劇「土神と狐」とサイエンス・トーク「日本の自然観から生命誌の世界観へ」を催されました。お誘いがあり、行つて観ましたので、その様子をつづります。

「土神と狐」は「一本木の野原の、北のはづれに、少し小高く盛りあがつた所がありました。いのころぐさがいっぱいに生え、そのまん中には一本の奇麗な女の樺の木がありました。…この木に二人の友達がありました。一人は丁度、五百歩ばかり離れたぐちゃぐちゃの谷地の中に住んでいる土神で一人はいつも野原の南の方からやって来る茶いろの狐だったのです」。こんな調子で宮沢賢治は物語を始めます。これを仮面劇では、舞台の中央に高台を作り、レースの衣をまとい樺の木に扮した美女が両手を左右にあげ、風になびくように手を震わせたり、体をよじつたりする。乞食のようなポロボロの衣を着た土神、黄色の衣に狐の仮面の狐。この狐は望遠鏡とかハイネの詩集を愛する西洋かぶれ。この二人が美女の樺の木をめぐる「三角関係」を見事に演じた。

嫉妬に狂つた土神が狐を殺したら、西洋かぶれのはずだった狐の巢はからっぽだった。土神がさめざめと泣くところで終わる。

土神の迫力ある演技が、神でありながら「己の心が揺れることを抑えられない」人の業(ごう)を思わせる。だれにでも、土神の気持ちと同じ様な経験があるのではないか。

サイエンス・トークは、生命誌館長の中村桂子さんと東京大学大学院教授の塚谷裕一さんとの対談です。生命誌館の基本は「具体と日常の中で自然を見つめ、それを表現すること」、塚谷さんは、「葉っぱの形の由来方」をDNA解析などで説明したり、文学を愛したりする研究者。ふたりが宮沢賢治の作品を通して、自然、生き物とどう向き合うのか、文明、文化をどう進めるかを話し合われました。



# 梵日記 4回目

私の商売は古い布のおもしろさ以上に客がおもしろい。常連の客は皆、少し変わっている。既製の服を買われるにしろ、オーダーを注文されるにしろスーパーのようにはいかない。お客の希望を聞き値段の交渉など時間をかけた会話がどうしても必要で、そこに「よもやま話」が入り込む。

こんなやり取りを何百回もしたお客が何人もいる、当然ひとりでも数百点の服になる。ここまでいかなくても五十回を超える人はかなりいる。そんな調子だから常連の客とは付き合いが二十年なんて方がいるし、しばらく来られなくても来店されれば親しく話は進む。お客と話をするのが、いや話を聞くのが仕事といえなくはない。だから、書くネタにこまることはないが、誠に残念であります。個人情報保護の法律もあるからプライバシーに関することは書けない。

それでも書きたいから、ご当人さんが読めば、私の事を書いていると分かるかもしれないが、他人さんには、まず特定できないように書きますから、想像して読んで下さい。なお、お客の了解が得られれば、かなり詳しく書くこともあります。次回からはじめます、まずは集中的に七年間で数百枚の服をお買いいただいたAさんから。もう十年も前に、ご姉妹で来られた時の話をしよう。

# 読者からの投稿 川柳

- 0円で財を成す人成さぬ人
  - 札幌のドーム揺るがすパホームンス
  - タペストリー思い出ギレに花が咲き
  - アルバムの中の五色の物語り
  - 倦怠期時にはポチとなりてワン！
- 真本嘉代子さん

# 読者からのたより

「松茸」秋祭りの次がシーズンでした。あの頃を思い出します。「松茸めし」「焼き松茸」「すき焼き」久しく食していません。ひと口食べたいなあと思います。 長岡市 Mさん

あなたの文章、手に取るように目に浮かびます。あの頃は姉や兄嫁さんは妹達に優しくったのが「ふつう」いや「当たり前」のように思っていました。御免ね。 大蔵司 Iさん

秋の明るい陽射しの中にキンモクセイの香がたちこめています。芥川だより、楽しみにしています。 長岡京市 Kさん

# 編集後記

今回は、少し早い正月号にしました。毎回ワクワクしながらやっています。次号は新年特大号を考えております。よろしくお願ひします。